

来年の商店会の行事に生かそうと、厚木B1グルメ、町田産業祭へと見学して、帰りの車内では「君津A1 4市グランプリ」とにぎやかに議論百出、来年への期待を大きく膨らませて帰りました。

それから数日後、紙上に市原市と袖ヶ浦市がB1グランプリ計画を発表されました。

ふと、人々は画一化なまちおこしは望んでいないのに、何時の間に先進地のモノマネとなって魅力の無い画一したまちを作ってしまったのでは…と考えさせられました。近隣の町でも近代化を急ぎすぎた結果、現代社会が求めている古く懐かしい美観を壊してしまったから、人は通り過ぎて行ったのだと思いました。

首都圏、4千万人の人の多くはふるさとを遠くにおいて「ゆるやかな時間が流れた少年の日のふるさとを思い出させてくれる空間を房総に求めている・・・」それは房総へ訪れる人の多くは中高年の方々が多いからであります。

今一度日本の古い美しいものをと一念発起して、今年は湖東三山から平安大和をめぐり、伊勢神宮に参拝、復活したフェリーで鳥羽から伊勢湾を渡り、渥美半島を廻って帰る2泊3日、総勢8人の旅となりました。

仕事の都合で朝9時に君津出発と言う悪い時間帯となりましたが、車中食で過ごし、夕日が傾いた頃、湖東三山、紅葉で有名な西明寺へと着きました。折から落日寸前の光が斜めに差し込んだ光と、影の織り成す世界は絶景そのものの美しさでありました。

寺の石垣に沿って、角が欠け不揃いになった石段を登る時、かつて平安、室町、鎌倉の人々がこの石段をのぼり、仏に救い求め、後生を祈った遠い昔からの石段だとの感慨がありました。その夜は京をさけて彦根へ一泊駅裏のひなびた食堂で一杯となりました。旅の酒はひなびたものの方が良い！早立ちして、信長、秀吉、光秀、三成から戦国のつわもの達の戦乱、興亡の夢の後を左右に眺めながらひた走りに大和路を下り、奈良へと入りました。

遷都1300年祭を避けたつもりが、行く先々は渋滞、駐停車禁止、満車で身動きできず、奈良公園中心に興福寺、春日大社、東大寺の1万歩コースとなりました。高齢者の旅人にはそれでも限界でした。

1300年の長い年月の風雨にいささかな姿も変えず立つ塔、建造物、歴史と技術、美しさに打たれました。私もすでに春秋何度か訪れましたが、改めて驚いた事は、日本の緑の象徴であります「松」の建在でありました。

日本の大自然の美しさは松を始めとする常緑樹であり、松の濃緑があるから日本の四季は一段と美しさを増す・・・。房総の松も再生を願わずにはおられませんでした。

その夜は二見ヶ浦に泊まり、朝、二見浦興玉神社へ詣で五十鈴川を渡り伊勢神宮へ参拝いたしました。年間7百万人の参詣者でにぎわう参道は、池田厚子さんのお参りも重なって大混雑でした。

何年か前に熊野から夜山道を走りましたが、伊勢の山々は別世界の漆黒の闇でありました。神の存在を感じさせる神秘さがありました。

反面、上総丘陵は広いから空が広く見えます。海が近いから青々と空が広がって見えるのです。「観光も経済も後の世の事を意識することが大切です。今の日本には後世を意識する心が薄い」と司馬遼太郎は嘆いております。

鳥羽から渥美半島まで復活し、満船になったフェリーで私達の旅は無事終わりました。

